40

中国医書にみられる糖尿病

魯　紅梅

糖尿病は西洋医学の病名であり、口の渇きと全身倦怠感をその初期の典型的な症状とする。中国医学には、それに相当する病気として消渇（消―消耗する、渇―口渇の意）が存在する。よって本文では代表的中国医書より消渇に関する記載をとりあげてその歴史変遷を探ってみる。

（一）最初の中国医書――『黄帝内経』

『黄帝内経』奇病論篇に消渇の名称があり、「美食の結果であり…いくら水を飲んでも飲み足りない…これには蘭草を煎服させる」とその病因と症状、治療について簡単に説明している。しかし、内科専門書でないため、規範化された治療が欠如している。

（二）最初の中国医学内科専門書――『傷寒雑病論』

本書は東漢張仲景（約一五〇―二一九年）により書かれ、『黄帝内経』の基本理論を継承し、弁証論治の理論を確立して中医内科の基礎を築いた。消渇についても、『金匱要略』消渇篇に、病的口渇を三つに分けて腎気円の証、五苓散の証、文蛤散の証をあげている。その治療方剤を詳しく記している。ただし、五苓散の証は「小便不利…渇欲飲水、水入則吐」とあり、糖尿病の典型症状とは言い難い。

（三）最初の病因証候学の専門書――『諸病源候論』

六一〇年、隋代医家巣元方により編纂され、上記の二書よりも病因と証候を具体的に説明している。消渇は美食の人に発生し、口渇、多尿の症状を呈し、多く癰疽を発生すると説明した。消渇の治療については記載されていないが、補養宣導の養生法が詳しく書かれてある。例えば、「養生法云人睡臥勿張口…其湯熨鍼石別有正方」であるが、ここでいう「其湯熨鍼石別有正方」とは当時に方剤の書物がかなり多くあることを述べているが、治療よりも養生の重要性を強調しているのは示唆に富む。

（四）内科治療の専門著作『千金要方』

唐代医家孫思邈（五八一―六八二年）は消渇の病因病機

について詳しく述べると同時に、大量の治療方剤のほかに鍼灸治療も加えた。お酒を長期飲用すれば消渇になると説明し、治療については「治消渇除腸胃実熱方」や「猪肚丸治消渇方」など方剤を五一種記載している。このなかでかなりの数の方剤が今なお臨床で応用されている。鍼灸治療については「消渇病で百日以上経てば鍼灸をしてはならぬ…罹ったばかりの患者は鍼灸してもよい」とあって、鍼灸治療の適応と禁忌を説明している。また、禁忌法について書いてあり、「一飲酒、二房労、三鹹食と麪」とあって、飲食、房労、鹹食と麪を慎めば、服薬しなくても治癒すると説明した。

以上を要約すれば、消渇の名称と基本理論は『黄帝内経』に由来し、証候類型と臨床症状は『金匱要略』と『諸病源候論』により補充、発展され、弁証施治は『金匱要略』と『千金要方』により充実され、時代の変遷とともに消渇の理論がしだいに成熟し、後世の治療に確固たる基礎を築いた。

糖尿病の歴史からわかるように、医学は時代とともに発展し、各種の疾病は段々征服されつつある。しかし、医学がどんなに発達してあるといっても「上工不治巳病治未病」のように、病気の予防に力を入れるべきではないか。

（順天堂大学医学部医史学研究室）